

4 国際交流

[概要]

本館では、研究活動の国際性を拡充するべく、国際研究集会の開催や外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣等を行っている。2023年度の具体的な取り組みは以下のとおりである。

1. 国際戦略の制定

本館は博物館機能を有する大学共同利用機関としてのミッションを達成し、現代的視点と世界史的視野のもとに、日本の歴史と文化に関する研究を推進する国際拠点としての役割を果たすため、以下の国際戦略を制定している。この国際戦略に対応するかたちで、海外研究機関との学術交流協定等の締結、国際交流事業等の充実、外国人研究員等の受入、国際シンポジウムの開催等に取り組んだ。

(組織的な連携)

- ・海外の機関との組織的な連携を強化する。当面は、東アジア、ヨーロッパ及び北米を重点地域とする。
- ・日本歴史研究の国際的なネットワークを構築する。
(共同研究、成果発信)
- ・国際的な共同研究を推進し、成果の国際発信を強化する。
- ・展示、フォーラム、博物館資料の活用等を通じて国際共同研究の可視化、高度化を図る。
(若手研究者育成)
- ・協定機関との派遣・招へい等を通じて若手研究者の育成を図る。

2. 学術交流協定等の締結

国立農業博物館（韓国）と新規に学術交流協定を締結した。

3. 学術交流協定等に基づく国際交流事業等の充実

ダラム大学東洋博物館（英国）との「北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援」等7件の国際交流事業を推進したほか、国際交流においても博物館型研究統合を推進した。国立民俗博物館（韓国）との国際連携展示「特別展《MASK—仮面の日常、仮面劇の理想》」（2023年10月24日～2024年3月3日）を、国立台湾歴史博物館（台湾）との国際連携展示「跨ぐ・1624：世界の島台湾」（2024年2月1日～2024年6月30日）を開催した。

4. 外国人研究員等の受入、本館研究者の海外派遣

本館の受入制度に基づき、外国人招へい研究者を3名受け入れたほか、人間文化研究機構の若手研究者海外派遣プログラムを活用して、本館研究者1名をケンブリッジ大学（イギリス）へ派遣した。

5. 国際シンポジウム等の開催

共創先導プロジェクト 日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」の一環として、シーボルト来日200年記念国際シンポジウム「シーボルト研究の100年」（2023年10月15日 主催：長崎市、国立歴史民俗博物館 協力：長崎歴史文化博物館）を長崎歴史文化博物館にて開催し、本館の国際化と研究分野・研究手法の多角化を研究者コミュニティの内外に示すことができた。

国際交流担当 中村 耕作

[国際交流事業一覧]

	相手機関名	事業名	事業主体者
継続	韓国 国立中央博物館	先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅳ	研究部 高田 貫太
	韓国 国立文化財研究院	国立文化財研究院との研究者交流事業	国際企画室長 山田 慎也
新規	韓国 国立慶北大学校人文学院	東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究	研究部 三上 喜孝
	韓国 国立釜山大学校博物館	国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における研究者交流と展示協力	研究部 高田 貫太
	台湾 国立台湾歴史博物館	日本と台湾からみた地域歴史像の解明	研究部 山田 慎也
	英国 ダラム大学東洋博物館	北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援	研究部 日高 薫
	韓国 国立民俗博物館	日韓共同による民俗研究の新構築	研究部 松田 睦彦

(1) 先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅳ 2022～2024年度 (事業主体者 高田 貫太)

1. 目的

学術交流協定締結機関である韓国国立中央博物館（以下、中央博）とは、2009年度～2012年度に第2期、2015年度～2018年度に第3期、2019年度～2021年度に第4期の共同研究を行い、総合展示第1室リニューアル事業に対する中央博側の協力を得ることができた。

引き続き、日韓の共同研究を継続する必要があることから、「先史～中世における日韓葬送儀礼の比較研究Ⅲ」をおこなうこととした。それに基づいて、展示協力についても一層推進していく。成果公開の場として、韓国国立中央博物館が2019年12月に開催する企画展示『加耶の本質』の内容に基づいて、歴博でも『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—』の開催が決定しており、その実現に向けて交流事業を推進する。

2. 今年度の研究計画

2022年度に開催した『加耶』展における学術交流の実績を土台として、共同研究の方向性、さらなる連携展示の可能性について相互に協議しつつ、共同研究会とそれに関する現地調査を1,2回程度行う。

3. 今年度の研究経過

【展示協力】

- ・2022年度に開催した、国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—』に関連して、その事業・研究報告を歴博研究報告の通常号に投稿し、掲載が決定している。
- ・2023年3～6月に国立金海博物館において開催された加耶展の里帰り展「海を渡った加耶人」において、図録作成に協力した。また、展示関連の国際シンポジウム（5月26日開催 金海博）において、高田が招へい発表を行った。
- ・中央博が実施する常設展示「高句麗室」の導入部リニューアル、並びに企画展示開催のために、当館所蔵の広開土王碑原石拓本のデータファイルの貸与を行うなど、様々な展示協力を実施した。

4. 今年度の研究成果

2022年度に開催した国際企画展示『加耶—東アジアを生きた、ある王国の歴史—』に関連して、本来は図録後半に掲載予定であった4本の論考と1本の史料編、そして開催にいたるまでの事業報告を一括して、歴博研究報告の通常号に掲載することができた。

また、国立金海博物館において開催された加耶展の里帰り展「海を渡った加耶人」においても、図録作成の協力、関連シンポジウムにおける発表など、学術交流を継続することができた。

加耶展終了後にただちに次の事業を具体化することは難しいけれども、今後の共同研究の進め方について、折を見て協議していく予定である。

5. 事業組織（◎は事業主体者，○は副主体者）

- ウン・ヨンヒ 国立中央博物館・学芸研究士
- リュ・ジョンファン 国立中央博物館・学芸研究官
- ◎ウン サンドク 国立中央博物館・考古歴史部長
- 藤尾慎一郎 本館研究部・教授
- 上野 祥史 本館研究部・准教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授
- 松木 武彦 本館研究部・教授
- ◎高田 貫太 本館研究部・教授

（2）国立文化財研究院との研究者交流事業 2021～2023年度 （事業主体者 山田 慎也）

1. 目的

本事業は本館と国立文化財研究院（韓国）との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。協定書の別表に「協定書第2条に基づく具体的な交流協力」として「研究者の交流」を掲げ、「毎年両機関は互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させるものとする」と定めていることから、これを国際交流事業として位置づけて実施する。研究者の相互受入に係る調整は、本館国際企画室と国立文化財研究院研究企画課を窓口として行い、双方の機関が組織的な連携を図る。

2. 今年度の研究計画

互いに研究者1～4名程度を相手機関へ最大2週間派遣し、相手機関の研究課題から1課題を選定の上、当該研究課題の研究会等に参加させる。

3. 今年度の研究経過

今年度の計画段階で、新型コロナウイルスの影響による海外への渡航の可否が判断できない状況にあり、事業を実施することができなかった。

4. 今年度の研究成果

新型コロナウイルスの影響が続いたため、派遣・受け入れともやむなく実施を見送った。

5. 事業組織（◎は事業主体者，○は副主体者）

- 崔 智燕 韓国国立文化財研究院・研究員
- 林 鍾恵 韓国国立文化財研究院・係長
- ◎辛 美貞 韓国国立文化財研究院・課長
- 三上 喜孝 本館研究部・教授
- 中村 耕作 本館研究部・准教授
- ◎山田 慎也 本館・副館長
- 工藤 航平 本館研究部・准教授
- 橋本 雄太 本館研究部・准教授

（3）東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究 2023～2025年度 （事業主体者 三上 喜孝）

1. 目的

本事業は本館と慶北大学校人文学術院との学術交流協定にもとづき、研究者の交流を図るものである。

慶北大学校人文学術院は、HK+事業「東アジア記録文化の源流と知的ネットワーク研究」として韓中日の木簡研究を推進している。本館との学術交流協定を通じて日本・韓国の古代木簡の共同研究を進め、東アジアにおける木簡文化、さらには漢字・儒教・律令など中国文化伝播の実態解明をめざす。

一方、本館でも、古代東アジアの文字文化に関する共同研究や、企画展示（「古代日本 文字のある風景」2001年、「文字がつなぐ 古代の日本列島と朝鮮半島」2014年）などをこれまで行ってきた。本館としては、慶北大学校人文学術院と積極的に学術交流を進めると同時に、この協定を足がかりに韓国や中国の他機関とも交流を進め、東アジア文字文化に関する研究拠点となることをめざす。

2. 今年度の研究計画

共同研究会とそれに関する現地調査を1,2回程度行う。

3. 今年度の研究経過

2023年度は、事業組織のメンバーが以下の国際会議に登壇した。

○第2回中日韓出土簡牘研究国際会議

場所：中国・河北省石家庄

日時：2023年10月20日～23日（研究発表は21日，22日）

発表者：尹在碩（現地参加）、三上喜孝（オンライン参加）

○慶北大学校 人文学術院 HK+事業団 第6回 国際学術大会

テーマ「木簡に反映された古代東アジアの思想と精神世界」

場所：韓国・統営市・コボクソンホテル

日時：2024年1月22日（月）～1月26日（金）（研究発表は23日，24日）

発表者：三上喜孝（現地参加）

4. 今年度の研究成果

2023年度は、新型コロナウイルスの感染対策が大幅に縮小されたことにより、韓国での国際学術会への現地参加が可能になり、活発な意見交換と学術交流を行うことができた。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

- ◎尹 在碩 国立慶北大学校人文学術院・院長
- 橋本 繁 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
- 李 東柱 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
- 金 跳咏 国立慶北大学校人文学術院・HK研究教授
- 仁藤 敦史 本館研究部・教授
- 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授
- 小倉 慈司 本館研究部・教授
- ◎三上 喜孝 本館研究部・教授

（4）国立歴史民俗博物館と釜山大学校博物館における 研究者交流と展示協力 2023～2025年度 （事業主体者 高田 貫太）

1. 目的

2023年度より、学術交流協定を3年間延長した。

総合展示第1室リニューアルが2019年3月に完成したことで、今後10年間、資料の借用が継続するため、定期的な資料チェックなどを目的とし、展示協力事業を継続していく。釜山大学校博物館から資料借用の要請があった際には、本館側も積極的に検討していく。

第3期より継続している研究者交流は、朝鮮半島南部の初期鉄器時代を中心に出土する弥生系土器の調査や、朝鮮半島の新石器時代から三国時代にかけての日韓交流関連資料の調査など、新たな研究テーマでの展開を模索している。

このような展示や研究者交流を通じて互いの研究内容への理解を深めながら、新しい事業・共同研究のシーズを見出していくことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①研究者交流 両機関は互いに研究者1名を10日ほど派遣し、研究交流を促進する。
- ②展示協力 本館総合展示第1室リニューアル事業において釜山大学校博物館から借用中の所蔵資料のメンテナンス。

3. 今年度の研究経過

- ・2023年10月10日～18日の日程で、藤尾、山下が釜山大学校博物館を訪問し、研究交流を実施した。期間中、釜山大学校博物館はリニューアル準備を進めており、その内容について知見を深めた。2023年12月にリニューアル事業は無事に終了している。
- ・2024年3月7日～10日の日程で、釜山大学校博物館から林尚鐸館長をはじめとする4名が歴博を訪問した。藤尾教授の最終歴博講演会の参席や、総合展示第1室の展示の調査など、交流を深めるとともに、2024年度以降の交流についても計画に沿って、研究者交流を行うことで合意した。

4. 今年度の研究成果

コロナ禍も一段落したことにより、それ以前の研究者交流を再開することができた。今年度末まで、本事業の主体者となってきた藤尾教授の最終歴博講演会に釜山大学校側の事業関連者を招へいしたこと、本館の招へい外国人研究者として金斗喆前館長が滞在されていること（2024年5月～7月）などによって、さらに両機関の信頼関係をつちかうことができています。

このような人的交流に基づきながら、学術的な事業のシーズを模索していきたい。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

- 安 星姫 釜山大学校博物館・学芸研究室長
- ◎林 尚鐸 釜山大学校博物館・館長
- 箱崎 真隆 本館研究部・准教授
- 坂本 稔 本館研究部・教授
- 齋藤 努 本館研究部・教授
- 中村 耕作 本館研究部・准教授
- 高田 貫太 本館研究部・教授
- ◎藤尾慎一郎 本館研究部・教授
- 山下 優介 本館研究部・テニユアトラック助教

（5）日本と台湾からみた地域歴史像の解明

2023～2026年度

（事業主体者 山田 慎也）

1. 目的

国立歴史民俗博物館と国立台湾歴史博物館は、2013年に共同研究を準備しはじめ14年に包括協定を締結し、以降2期にわたり共同研究を継続してきた。第1期の具体的な主題は震災経験であり、第2期のそれはスポーツの歴史的意味であった。いずれも各館その他で展示および展示図録の刊行、研究集会実施を通じて、国際社会への発信もこなっている。3期目となる今期は、国立台湾歴史博物館で2024年1月31日～8月18日に開催予定の『東アジア海港都市特別展（仮題）』（内容：東アジアおよび東南アジアの海港都市の貿易と文化交流）に併せて、共同研究をおこないながら、歴博においても、2024年秋から2025年の冬にかけての1～2カ月間の会期で、特集展示『台湾と日本—鄭成功物語が駆けぬけた3つの時代（仮題）』を開催したい。展示は、鄭成功が生きた17世紀、日本で新たな物語へと変容する18世紀、そして近現代という3つの時代を通じて、台湾と日本の歴史と文化のつながりを明らか

にするという内容を考えている（第3展示室「近世」の特集展示室を想定）。また総合展示新構築の近現代展示室リニューアル事業に関連して、継続的な共同研究も視野に入れる。これまで共同研究を展開する上で、国立台湾歴史博物館の近隣にある国立成功大学など、各機関と研究者同士のネットワークを構築してきたが、covid19への各国の方針の相違なども生じ、ここ数年は直接の交流が困難な状況にあった。この状況に鑑みて、双方の研究交流を組織的に発展させ強固なものにすることも目的のひとつとする。

2. 今年度の研究計画

本館教員の2～3名を年間1～2回派遣し、共催展示に向けての共同研究と歴博で開催予定の展示内容の検討をおこなう。2023年度は台南で1回、歴博で1回の共同研究会を実施する。双方での展示の具体的内容、資料選択を検討する。

3. 今年度の研究経過

2023年5月29日～5月31日、国立台湾歴史博物館の張隆志館長、石文誠副研究員、呂怡屏助理研究員、周宜穎助理研究員が来館され、共催展示に関する打ち合わせのほか、歴博所蔵の関連資料の調査を実施した。その際、第5・第6展示室リニューアルの計画のうち、台湾に関する展示部分についても協議した。

その後、主催：国立歴史民俗博物館・国立台湾歴史博物館、協力：台南市立博物館という実施形態で開催することが決まり、協力協議書の策定・締結を経て、先行して開催される国立台湾歴史博物館での展示「跨ぐ・1624：世界の島台湾」（2024年2月1日～2024年6月30日）に向けて、必要な情報の提供や資料の貸出等をおこなった。

歴博で開催予定の共催展示（第3展示室特集展示として実施）「歴史・文化の中の鄭成功」（2024年11月26日～2025年1月26日）について、展示タイトル、全体の構成、各テーマの内容、展示資料について検討を進める打ち合わせを実施した（参加者：荒木和憲・西谷大・久留島浩・大久保純一・山田慎也・内田順子、2024年1月11日、Zoom開催）。

この検討を踏まえ、2024年2月2日、荒木・西谷・内田・佐川享平（本館・特任助教）、金出地崇（本館・博物館事業課展示係）・寺村美南（本館・研究協力課企画・渉外係）が国立台湾歴史博物館を訪問し、第3展示室特集展示「歴史・文化の中の鄭成功」の展示内容（報告：荒木・内田）、「鄭成功的想像再現 多元視角下の鄭成功」（報告：謝仕淵、台南市文化局・局長）、「国立台湾歴史博物館 日本時代及戦後鄭成功蔵品簡介」（報告：石文誠）の各報告に基づき、情報交換およびディスカッションをおこなったほか、「跨ぐ・1624：世界の島台湾」のオープニングセレモニー・展示解説会に参加した。さらに翌2月3日には、国立台湾歴史博物館の陳怡宏研究組組長の案内で、鄭成功に関連する資料・史跡の調査を実施した（おもな調査対象：台南市立博物館、延平郡王祠、台南車站圓環、六合境油行尾福德爺廟、鄭成功祖廟、赤崁楼、大天后宮、安平古堡、鹿耳門鎮門宮、鄭成功墓址紀念碑）。

4. 今年度の研究成果

2023年5月と2024年2月の研究打ち合わせ・資料調査を通じて、両博物館で実施する展示の内容について相互理解が深まった。これにより、展示に使用する資料の選定や貸出に関する調整が進み、共催展示「跨ぐ・1624：世界の島台湾」の開催が実現した。同様に、歴博で計画されている第3展示室特集展示「歴史・文化の中の鄭成功」に関しても、詳細な意見交換や関連資料の調査がおこなわれ、特集展示の構成がほぼ確定した。さらに、歴博で進行中の第5・第6展示室のリニューアルに向けて、両博物館間の組織的な研究交流の基盤が築かれた。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

○石 文誠 国立台湾歴史博物館・研究組研究員

◎陳 怡宏 国立台湾歴史博物館・研究組長

○内田 順子 本館研究部・教授

◎山田 慎也 本館・副館長

西谷 大 本館・館長

大久保純一 本館研究部・教授

久留島 浩 本館研究部・名誉教授

荒川 章二 本館研究部・特任教授

荒木 和憲 九州大学大学院・准教授

樋浦 郷子 本館研究部・准教授

（6）北部イングランド所在日本資料の調査研究と活用支援 2023～2026年度 （事業主体者 日高 薫）

1. 目的

ダラム大学は、北部イングランドに位置する英国を代表する名門大学であり、エジプト・中国・日本資料を豊富に所蔵する大学附属の東洋博物館は、学生の教育利用のみならず、近隣の学校や住民に親しまれる地域博物館の役割も果たしている。

本事業においては、同館をはじめとする北部イングランド所在の日本資料や、スコットランド所在の日本資料を用いた展示を、現地および日本において開催し、教育事業と連携させることにより、英国所在の日本関係資料の活用を充実させることを目的とする。

2. 今年度の研究計画

- ①三木美裕氏を含め国立歴史民俗博物館から研究者を派遣し、北部イングランドおよびスコットランドにおける日本美術関連資料の調査をすすめる。
- ②グラスゴー博物館機構が所蔵する日本関係資料の目録作成と日本展開準備に協力する。
- ③ダラム大学東洋博物館所蔵資料を用いた小規模な展示を、歴博（3室特集展示）および現地で共同開催する。
- ④北部イングランドおよびスコットランド地域における日本文化理解と、日本研究活性化のための教育支援事業を並行して推進する。

3. 今年度の研究経過

- ①ダラム大学より、レイチェル・パークレー東洋博物館学芸部長を招聘し、クレイグ・パークレー同館館長を交えて、歴博と同博物館との共同研究に関する打ち合わせをおこなうとともに、イギリス側の活動に協力した。
- ②2024年7月23日～10月6日に歴博で開催予定のダラム大学東洋博物館所蔵資料を用いた特集展示（「スクワイア家の記憶—ある英国人技術者の遺品から—」、第3室特集展示室）開催に向けて、レイチェル・パークレー氏、三木美裕氏、大久保、日高で展示構成案・展示リストの作成、運搬輸送計画等、必要な準備を進めた。
- ③ダラム大学、スコットランド国立博物館、ウェールズ国立博物館、大英博物館に分割寄贈されたハイアット・キング夫妻旧蔵日本陶磁コレクションの調査・目録化・活用等について、三木が各所蔵機関を訪問して協議を進めた。

4. 今年度の研究成果

日本文化に関する常識や理解の度合いが国内とは著しく異なる海外においては、様々な制約があり、現地の実情やニーズに応じた日本文化発信が求められる。そこで本事業では、連携機関の担当者との対話を重ねることによって、日本的な価値観の一方的な押しつけではなく、現地が求める資料情報の提供や、活用のための支援事業を推進し、新しいスタイルの《日本展示》の実践を試みている。

今年度は、ダラム大学東洋美術館に所蔵されながら、従来展示機会がほとんどなかったスクワイア家関係資料の日本における展示開催を目指し、順調に開催準備を進めることができた。イギリス所在の貴重な資料を日本において展示することにより、調査研究の成果を広く還元し、資料価値を高めることが期待される。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

- ◎レイチェル・パークレー ダラム大学東洋博物館・学芸部長
 クレイグ・パークレー ダラム大学東洋博物館・館長
 澤田 和人 本館研究部・准教授 工藤 航平 本館研究部・准教授
 三木 美裕 本館・共同研究員 ○大久保純一 本館研究部・教授
 ◎日高 薫 本館研究部・教授

（7）日韓共同による民俗研究の新構築 2023～2027年度 （事業主体者 松田 睦彦）

1. 目的

本事業は3期15年にわたって積みあげられてきた本館と韓国国立民俗博物館との交流による学術的実績と信頼関係をさらに進展させ、日韓の研究者の協力によって民俗研究の新たな領域を開拓することを目的とする。具体的には、両館の研究者の関心にもとづいた調査・研究活動を相手国において実施し、その成果を研究会等で共有することで、従来の研究では見落とされていた日韓、あるいは東アジアをフィールドとした課題の発見を目指す。さらに、

その課題を解決するための国際共同研究のあり方について模索する。

2. 今年度の研究計画

2023年度は、5年間の交流事業の具体的なあり方を協議するとともに、参加メンバーが各自の研究課題を設定することを旨とする。さらに、設定した研究課題にもとづいた調査・研究を実施する。

3. 今年度の研究経過

6月および10月に韓国国立民俗博物館を訪問して打ち合わせをし、日韓の耕織図を取り上げ、そこに描かれた生活文化の比較をテーマとした共同研究を実施することで合意した。さらに2月に韓国で行われた打ち合わせでは、2024年4月以降に、両機関の交流メンバーが双方の国を訪問し、耕織図の調査を実施することが決まった。

4. 今年度の研究成果

今年度は具体的な研究内容および研究計画を決定するための打ち合わせが行われ、2024年4月以降の計画が定められた。

5. 事業組織（◎は事業主体者、○は副主体者）

◎イ・イネ 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

キム・スンユ 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

キム・ユソン 韓国国立民俗博物館・学芸研究士

○関沢まゆみ 本館・副館長

◎松田 陸彦 本館研究部・准教授

山田 慎也 本館・副館長

[国際シンポジウム]

シーボルト来日200年記念国際シンポジウム「シーボルト研究の100年」

会 場：長崎歴史文化博物館

会 期：2023年10月15日

参 加 者：124人（うち外国人6人）

主 催：長崎市・国立歴史民俗博物館

協 力：長崎歴史文化博物館

使用言語：日本語・ドイツ語（同時通訳付き）

1. 開催趣旨

シーボルトの死後、彼の功績はさまざまな形で顕彰され研究されてきた。

本シンポジウムでは、これまでのシーボルト研究を振り返り、とくに1996年の生誕200年記念事業以降に展開したシーボルト研究について整理し、最新成果を広く共有することを目的とした。シーボルト関係資料を多く所蔵するドイツの研究者や、歴博のプロジェクトに参加したメンバーに加え、長崎の研究者からの報告により構成し、今後の研究の展望について議論を深める機会とした。

なお、国立歴史民俗博物館では、人間文化研究機構「日本関連在外資料調査研究」事業の一環として、2010年から継続的にシーボルト父子関連資料の調査研究を推進してきた。本シンポジウムは、同機構の共創先導プロジェクト（共創促進研究）日本関連在外資料調査研究「外交と日本コレクション—19世紀在外日本資料の世界史的文脈による研究と現地およびオンライン空間における活用」の成果を反映するものである。

2. 開催内容

進行：工藤航平（国立歴史民俗博物館・准教授）

13：30～13：35 開会挨拶 西谷 大（国立歴史民俗博物館・館長）

司会：宮坂正英（長崎純心大学・客員教授）

13：35～13：50 報告1 日高 薫（国立歴史民俗博物館・教授）

「シーボルト父子の日本展示とその復元 国立歴史民俗博物館のプロジェクトが目指したもの」

- 13：50～14：20 報告2 ブルーノ・リヒツフェルト（ミュンヘン五大陸博物館・元副館長）
「ヴィルヘルム・ハイネによる日本の絵画とシーボルトの『ニッポン』にみるそのモデル」
- 14：20～14：45 報告3 堅田智子（関西学院大学・助教）
「アレクサンダー／ハインリッヒ・フォン・シーボルト研究の現在―日独関係史の深化と発展を目指して―」
- （休憩15分）
- 15：00～15：25 報告4 木村直樹（長崎大学・教授）
「シーボルト研究から対外関係史研究へ その広がり」
- 15：25～15：50 報告5 織田 毅（シーボルト記念館・前館長）
「長崎におけるシーボルト研究」
- （休憩5分・会場設営）
- 15：55～16：50 コメントおよび質疑応答 これからのシーボルト研究
司会：宮坂正英
登壇者：小林淳一（東京都江戸東京博物館・前副館長）、沓澤宣賢（東海大学・名誉教授）、日高 薫、ブルーノ・リヒツフェルト、堅田智子、木村直樹、織田 毅
まとめコメント：コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン
- 16：50～16：55 閉会挨拶 徳永 宏（シーボルト記念館・館長）

3. 総括

本シンポジウムは、歴博が人間文化研究機構の在外日本関連在外資料調査研究プロジェクトの一環として、2010年以降第2期～第4期にわたり継続的に推進しているシーボルト父子関係資料の総合的な調査・研究・活用事業に基づくものである。父フィリップ・フランツ・シーボルト来日200年を記念して、これまでのシーボルト研究を振り返り、とくに1996年の生誕200年記念事業以降に展開したシーボルト研究について整理するとともに、最新成果を広く共有する目的で開催された。

前半ではプロジェクト参加者から歴博の調査研究による当該研究の新展開について報告がなされ、父フィリップ・フランツ関係の膨大なもの資料および文献資料のアーカイブ化や展示公開によって、新たな視点からの研究が飛躍的に進展したこと、また従来ほとんどおこなわれてこなかった息子たち（アレクサンダーおよびハインリッヒ）の研究状況とその重要性が示された。

後半は、対外交流史および長崎学の立場からプロジェクト外の研究者が報告をおこない、より高い視座から現状のシーボルト研究全体を客体化する試みがなされた。

最後の全体討論では、これらの報告をふまえて今後のシーボルト研究の展望について活発な議論がおこなわれ、所蔵者側からの意見を含め、19世紀の歴史研究におけるシーボルト研究の意義について認識を深める機会となったことは極めて意義深い。

本シンポジウムは、前日の長崎市企画の記念シンポジウムと対をなすかたちで長崎市との共催によって開催され、長崎歴史文化博物館やシーボルト記念館における企画展示等の関連行事と連携していたため、国内はもとより海外のシーボルト研究者、一般参加者の関心も高く、読売新聞（令和5年10月21日）や長崎新聞（令和5年10月25日）等で詳しくとりあげられた。

[外国人招へい研究者]

氏名	所属	研究課題	期間
サレム・カーラ・レネ SALEM CARLA RENÉ	BeMA アート美術館及びSBGアートギャラリー	国際的な歴史資料保全手法の実践的検討―紙資料を中心に	2023.6.2～ 2023.8.30
レイチェル・バークレイ Rachel Barclay	ダラム大学東洋博物館	ダラム大学東洋博物館蔵の日本コレクションを用いた、日本の歴史文化の展示活動の向上をめざして	2023.10.30～ 2023.11.26
イナムギョ 李 南珪	韓神大学校博物館	日韓古代・中世製鉄文化の比較研究	2024.2.1～ 2024.3.16

[協定締結機関との交流]

招 聘			
氏 名	所 属	用 務	期 間
ヤン・シュミット	ベルギー ルーヴェン大学文学部	協定更新に関する協議	2023.6.4～ 2023.6.6
クリス・ヴァン・ヘッケ ロム			
マーチン・クーロシュ			
アミル・リヤド			
カート・ウィリス			
アンゲラ・ショッテンハ マー			
ブリジット・メイジンス			
アンナ・ローランド			
アルノ・ヴァン・ボクセ ム	ベルギー ルーヴェン大学文学部	歴博・ルーヴェン大学共同ワークショップへの 参加	2023.8.31～ 2023.9.27
レイチェル・パークレイ	英国 ダラム大学東洋博物館	外国人招へい者としての研究（研究課題「ダラム 大学東洋博物館蔵の日本コレクションを用いた、 日本の歴史文化の展示活動の向上をめざして」）	2023.10.28～ 2023.11.26
林 尚澤	韓国 国立釜山大学校博物館	釜山大学校との国際交流事業における研究打ち 合わせ	2024.3.7～ 2024.3.10
李 昌熙	韓国 国立釜山大学校博物館	釜山大学校との国際交流事業における研究打ち 合わせ	2024.3.7～ 2024.3.10
安 在皓	韓国 国立釜山大学校考古学科	釜山大学校との国際交流事業における研究打ち 合わせ	2024.3.7～ 2024.3.10
安 星姫	韓国 国立釜山大学校考古学科	釜山大学校との国際交流事業における研究打ち 合わせ	2024.3.7～ 2024.3.10

派 遣 ※協定機関における用務を抜粋			
氏 名	行 先	用 務	期 間
高田 貫太	韓国 大韓文化財研究院	朝鮮半島西南部の前方後円墳に関する資料調査・ 踏査	2023.7.12～ 2023.7.15
橋本 雄太	英国 ケンブリッジ大学	令和5年度機構若手研究者海外派遣プログラム 「前近代日本資料研究のための国際協働プラット ホームの開発」に係る調査研究	2023.7.24～ 2023.8.25
高田 貫太	韓国 大韓文化財研究院	朝鮮半島出土埴輪に関する資料調査・踏査	2023.8.18～ 2023.8.21
藤尾 慎一郎	韓国 大韓文化財研究院	基幹研究「先史から近代における日朝交流史像の 再構築」にかかわる現地調査	2023.8.26～ 2023.8.31
高田 貫太			
松田 睦彦			
山下 優介			
川邊 咲子	ベルギー ルーヴェン・カトリック大 学文学部	The 33rd EAJRS Conferenceでのワークショップ と学会参加	2023.9.11～ 2023.9.18
橋本 雄太			
後藤 真	ベルギー ルーヴェン・カトリック大 学文学部	The 33rd EAJRS Conferenceでのワークショップ と学会参加および打ち合わせ	2023.9.12～ 2023.9.19
石塚 昌輝	ベルギールーヴェン・カト リック大学文学部	The 33rd EAJRS Conferenceでのワークショップ と学会参加（の補助）	2023.9.11～ 2023.9.18

氏名	行先	用務	期間
後藤 真	インドネシア バンドン工科大学	バンドン工科大学との協定についての打ち合わせ ICON ARCADE2023での研究発表と学会参加	2023.10.9～ 2023.10.15
橋本 雄太			
小野塚 航一			
川邊 咲子			
亀田 堯宙			
藤尾 慎一郎	韓国 国立釜山大学校博物館	釜山大学校博物館蔵資料および金海市会峴里遺跡 出土土器の調査研究打ち合わせ、踏査	2023.10.10～ 2023.10.18
山下 優介			
松田 睦彦	韓国 国立民俗博物館	韓国国立民俗博物館への資料貸与の演示作業立ち 会い	2023.10.18～ 2023.10.20
松尾 恒一	韓国 国立民俗博物館	韓国国立民俗博物館への資料貸与の演示作業立ち 会い	2023.10.20～ 2023.10.21
樋浦 郷子	台湾 国立台湾歴史博物館	代表科研：基盤C「非就学者層に注目してえがく 植民地期朝鮮の教育史」にかかる調査	2023.10.31～ 2023.11.2
王 羽萌	台湾 国立台湾歴史博物館	共同研究「近代東アジアにおけるエゴ・ドキュメ ントの学際的・国際的研究」の研究会に参加	2023.10.31～ 2023.11.2
日高 薫	台湾 国立台湾歴史博物館	国立台湾歴史博物館「跨ぐ・1624：世界の島台湾」 (会期：令和6年2月1日～令和6年6月30日) における館蔵資料借用のクーリエ	2024.1.21～ 2024.1.29
後藤 真	韓国 国立民俗博物館	韓国国立民俗博物館における古写真アーカイブ状 況確認・ディスカッション・研究会打ち合わせ・ 展示巡検、韓国国立民俗博物館・歴博共催の韓国 古写真に関する研究会への参加・報告	2024.1.22～ 2024.1.26
橋本 雄太			
高科 真紀	韓国 国立民俗博物館	写真資料の公開活用に向けたデータ構築と権利に 関わる日韓合同研究会・関連調査	2024.1.22～ 2024.1.27
三上 喜孝	韓国 国立慶北大学校人文学院	慶北大学校主催の国際学術会議に出席、登壇	2024.1.22～ 2024.1.26
西谷 大	台湾 国立台湾歴史博物館	国立台湾歴史博物館特別展示「跨ぐ・1624：世界 の島台湾」開幕セレモニーへの参加および交流事 業に関する打合せ、台南市内巡検、台北での博物 館視察	2024.1.31～ 2024.2.5
内田 順子			
佐川 享平			
金出地 崇			
寺村 美南			
川村 清志	台湾 国立台湾歴史博物館 国立台北芸術大学	澎湖の元宵節見学及び撮影、国立台湾歴史博物館 巡検、日台の民俗映像についてのシンポジウム、 基幹研究プロジェクト（地域文化）に関する打ち 合わせ	2024.2.22～ 2024.2.29
高科 真紀			
松田 睦彦	韓国 国立民俗博物館 国立農業博物館	国際交流事業打ち合わせおよび展示協力、博物館 視察	2024.3.3～ 2024.3.6
川村 清志	台湾 国立台北芸術大学	国際シンポジウム「地域文化のドキュメンテー ションとアーカイブズ（仮）」の打ち合わせおよ び巡検	2024.3.14～ 2024.3.16
高科 真紀			
松田 睦彦	台湾 国立台湾歴史博物館	フォーラムへの出席および巡見	2024.3.20～ 2024.3.24
後藤 真	ベルギー ルーヴェン・カトリック大 学文学部	EAJRSでの成果共有にかかる打ち合わせ、当該 科研総括研究会、ルーヴェン大学人文学科長との 挨拶と面談、日本歴史資料の被災状況に係る状況 説明と共有方法の打ち合わせおよび協定を踏まえ た今後の連携方法に関する打ち合わせ、科研費の 成果を踏まえたルーヴェン大学にかかる文化遺産 ディスカッション会議	2024.3.21～ 2024.3.28
高田 貫太	韓国 大韓文化財研究院	墳墓からみた倭と栄山江流域の交流に関する資料 調査・踏査	2024.3.27～ 2024.3.30

氏名	行先	用務	期間
山下 優介	韓国 大韓文化財研究院	令和6年度開発型共同研究に関する資料調査・研究打ち合わせ	2024.3.27～ 2024.3.30

[海外派遣]

氏名	行先	用務	期間
科学研究費補助金			
樋浦 郷子	韓国	2023年4月1日開始の代表科研「非就学者層に着目してえがく植民地期朝鮮の教育史」調査	2023.4.3～ 2023.4.6
松田 陸彦	韓国	科研基盤(B)「朝鮮海出漁資料の研究資源化とその活用」にかかわる学術大会参加および研究打ち合わせ	2023.4.20～ 2023.4.24
松田 陸彦	韓国	科研基盤(B)「朝鮮海出漁資料からみた植民地社会の実態研究」にかかわる調査	2023.6.8～ 2023.6.12
高科 真紀	韓国	科研基盤(B)「朝鮮海出漁資料からみた植民地社会の実態研究」にかかわる調査	2023.6.8～ 2023.6.12
吉井 文美	英国	ロンドン大学SOAS図書館特別コレクションでの資料調査	2023.7.10～ 2023.7.16
三上 喜孝	韓国	科学研究費基盤研究(B)「古代日本と朝鮮の金石文からみた東アジア文字文化の地域的展開」の補足調査ならびに研究打ち合わせ	2023.7.15～ 2023.7.17
松尾 恒一	マレーシア	マレーシア・ペナン・ジョージタウンにおける町の年中行事「中元普度」の儀礼調査	2023.9.11～ 2023.9.16
川邊 咲子	メキシコ	CIDOC2023での学会発表と学会参加	2023.9.23～ 2023.9.30
亀田 堯宙	メキシコ	CIDOC2023での発表および情報収集, 科研代表の嘉村哲郎氏との打ち合わせ	2023.9.23～ 2023.10.1
日高 薫	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2023.10.2～ 2023.10.9
樋浦 郷子	韓国	科研課題: 基盤B「近現代世界における教育の世俗化と宗教性に関する比較社会史的研究」の調査	2023.11.22～ 2023.11.27
若木 重行	ドイツ	サーモフィッシャーサイエンティフィック社プレーメン工場において最新型の質量分析計を用いた装置デモ分析, ならびに高精度Sr・W同位体分析実現のための基礎実験を行う	2023.11.25～ 2023.12.1
澤田 和人	米国	美術館が所蔵する日本染織品の調査研究	2024.2.8～ 2024.2.17
山田 慎也	フランス	フランスにおける墓地調査	2024.3.20～ 2024.3.25
吉井 文美	台湾	科研基盤C「日中戦争・太平洋戦争期華南における中国占領地支配の進展と国際環境の変容」の研究テーマにかかる資料調査	2024.3.20～ 2024.3.27
福岡 万里子	米国	幕末日本開国史に関する米国議会図書館・国立公文書館での資料調査, ニューヨーク市立大学等での研究打ち合わせ	2024.3.20～ 2024.3.31
機構基幹研究プロジェクト・共創先導プロジェクト			
後藤 真	オーストリア	DH2023での学会発表と学会参加ルクセンブルク大学におけるDHワークショップ参加	2023.7.9～ 2023.7.19
亀田 堯宙			
川邊 咲子	ベルギー	EAJS2023での学会発表と学会参加	2023.8.15～ 2023.8.22

氏名	行先	用務	期間
後藤 真	ベルギー	EAJS2023での学会発表とディスカッション	2023.8.15～ 2023.8.22
亀田 堯宙	ベルギー	EAJS2023でのセッション司会及び情報収集	2023.8.15～ 2023.8.22
日高 薫 工藤 航平	ドイツ	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2023.9.8～ 2023.9.18
酒井 康平	ドイツ	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査・撮影	2023.9.7～ 2023.9.18
坂本 稔	韓国	EAAMS-9（第9回東アジアAMSシンポジウム）における成果報告	2023.11.21～ 2023.11.25
日高 薫 工藤 航平	ポルトガル	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクトにおける資料調査	2024.2.19～ 2024.2.25
橋本 雄太	米国	共同研究「日本歴史文化知」人文情報ユニット研究会への参加, CEAL 2024 Annual Meetingへの参加, AAS 2024 Annual Conference (The Association for Asian Studies Annual Conference) への参加・ブース出展	2024.3.13～ 2024.3.19
日高 薫 工藤 航平	オーストリア	「日本関連在外資料調査研究」プロジェクト資料調査	2024.3.17～ 2024.3.24
その他の調査・研究・学会・シンポジウム等			
川村 清志	中国	日中戦時下の『女声』研究に関する日中交流史についての調査と巡検	2023.9.7～ 2023.9.10
松木 武彦	スロベニア	国際会議 Conference of the European Association for Asian Art and Archaeology への参加	2023.9.13～ 2023.9.19
他の研究機関の依頼による海外調査・研究等			
高田 貫太	韓国	韓国加耶史学会における発表（招聘）	2023.5.24～ 2023.5.27
松木 武彦	イタリア	研究会打ち合わせ及びBe-Archaeo 特別展の見学（16日-18日）Be-Archaeo First Summer School 参加（19日-21日）	2023.6.15～ 2023.6.23
高科 真紀	パチカン市国	パチカン使徒文書館とのプロジェクト打ち合わせ	2023.9.10～ 2023.9.16
小倉 慈司	韓国	ワークショップ「井上哲次郎と国民国家」への参加	2023.12.17～ 2023.12.19